

理学系研究科長・理学部長就任のご挨拶

岩澤 康裕 (化学専攻 教授)

私は、この4月1日から理学系研究科長・理学部長に就任致しました。明治10年の東京大学創設と同時に開設されました理学部の持つ長い歴史の叡智を大切に、理学(基礎科学)の中核拠点としての責任を自覚し、新たな知の開拓に努めて行きたいと思っております。また、我が国の次代の人材育成の中核拠点としての使命を十分に果たして行きたいと思っております。その中で、理学の持つ意味や、そのあり方の本質を再確認し、積極的に自らを変革し、なお一層の先端的な理学的教育研究を進める決意を固めております。

私は、これまでの評議員の任にありました2001-2003年度の3年間、理学系研究科・理学部憲章、自己点検・外部評価ガイドライン、法人化中期目標・中期計画、新組織体制・運営方針など現在の理学系研究科・理学部の運営・活動の

基本指針となる様々な事項の草案作成に携わってまいりました。従いまして、理学系研究科・理学部の運営方針と考え方は、平成17年度新執行部体制に移行しても、これまでと大きく変わることはないものと考えます。

国立大学の法人化により、大学の枠組みが大きく変わり1年間が経ちました。まだまだ法人化のゴールへの不断の模索が続くと思います。その中で理学系研究科・理学部は自らの意志で対応し、より良い理学的教育研究を進める決意です。その規範として理学系研究科・理学部憲章がございます。理学の知の多様性こそが知の創造の源である信じます。理学部の憲章には、この「知の創造と継承」が高らかに謳われています。

皆様のご理解と益々のご支援をお願い申し上げます。



いwasawa やすひろ
岩澤 康裕

理学系研究科化学専攻教授。理学博士。1946年生まれ。東京大学理学部化学科卒業。専門は、触媒化学・表面科学。平成15年秋の紫綬褒章受章。現在、触媒学会会長、日本表面科学会会長、日本化学会学術研究活性化委員会委員長、日本化学会Pacifichem2005ハワイ年会実行委員長。

第7回公開講演会 開催される

■ 広報委員 田近 英一
(地球惑星科学専攻 助教授)

東京大学大学院理学系研究科・理学部が主催する公開講演会が、4月28日に駒場キャンパスの数理学研究科大講堂で行われた。今回は「理学研究が探る宇宙・地球・生命」と題し、一般市民や駒場生の関心が深いと思われる3つのテーマの講演を通じて基礎科学の面白さや大切さを伝えるような企画にした。

最初に、理学系研究科長である岩澤康裕教授から挨拶があり、それに引き続いて榎森康文助教授(生物化学専攻)による「ゲノムから探る味と匂いを感じるしくみ」、古村孝志助教授(地震研究所/(兼)地球惑星科学専攻)による「大地

震の揺れに地球シミュレータで挑む」、最後に岡村定矩教授(天文学専攻)による「宇宙の新たな謎～ダークマターとダークエネルギー～」という3つの講演が行われた。どれも入念な準備と工夫がされていることが分かる素晴らしい講演で、大変分かりやすく、一般向け講演のお手本というべきものばかりであった。

今回の講演会には200名の参加者があり、会場は熱気につつまれ、大盛況であった。聴衆は中学生から年配の方々まで幅広い層が集まり、一般社会へ向けた理学系研究科・理学部の広報活動として大成功だったように思われる。なお、次回は今年の秋頃に本郷キャンパスでの開催を予定している。



■ 左上段：岡村定矩教授，左下段：榎森康文助教授，右：古村孝志助教授

理学系研究科 セクシュアル・ハラスメント 防止講習会報告

理学系研究科男女共同参画 WG 講習会担当
小林 昭子（スペクトル化学研究センター 教授）

理学系研究科男女共同参画 WG は、これまでに活動の一環として、セクシュアル・ハラスメントの意識を向上させるため、研究科におけるセクシュアル・ハラスメント防止講習会の企画を支援してきた。今回、岡村定矩研究科長の要請を受け、庶務と男女共同参画 WG が共同で、第2回理学系研究科セクシュアル・ハラスメント防止講習会を平成 17 年 3 月 18 日 17 時より化学講堂で開催した。第1回は昨年 4 月の教授会の会議中、教授会メンバーを対象にして短時間（30 分）行ったが、今回は、助手・ポスドクを主たる対象とし、1.5 時間のプログラムを組んだ。出席者総数は 119 名（物理 28 名、天文 2、地惑 2、化学 28、生化 13、生科 21、植物園 1、スペクトル 2、原子核 8、地殻 5、天文研 2、ビッグバン 2、素粒子 1、遺伝子 1、工学系研究

科 1、事務 2）であり、対象者総数の約 1/3 の出席率であった。

講習会は、東京大学ハラスメント相談室の相談員である丹羽雅代氏と国中咲枝氏とを講師に迎えて、“セクシュアル・ハラスメントのないキャンパスに向けて”という主題で行われた。前半では、セクシュアル・ハラスメントを防止するための基本として、セクシュアル・ハラスメントの起こりやすい場、他大学の具体例、セクシュアル・ハラスメントの影響などについての話がなされた。後半は、新しい試みとして、裁判等を参考にして相談室で作成されたケーススタディを題材に、スタッフと学生の健全な関わり方とは何か、当事者や周囲の人等それぞれの立場で何ができるか、ハラスメント相談室をどのように利用していくか等の問題を、講師が会場の出席者と対話を行う形式で紹介した。

この講習会について、参加者に書いてもらったアンケート・感想には、『ケーススタディが参考になった』という意見が多くみられたが、一方で、もっと「要

注意」の事例、具体例、意外な例等についての話が聞きたかった、という意見も多くみられた。また、理学部特有な問題を踏まえて理学部の事例に基づいた議論や被害者にならないための講習が必要ではないか、という意見、さらには、講習の対象者は助手・PD と教授・助教授を分けた方が良い、ケーススタディについては学生・院生向けに行えばもっと有効であろう、という意見もみられた。今回の講習では、ハラスメント相談所に早期に相談することの重要性が指摘されたが、早期相談の効果についてももっと強調すべき、という意見もあった。この他、前半部分の説明はやはり冗長であったという意見が目立ち、さらに改善の余地があるようであるが、後半の対話形式による説明手法についても、理解を助けたという意見と対話による効果は少なかったという意見がみられ、講習会の形式の改善が必要であることを感じた。

これらの意見を総合すると、今回の講習会は第1回のセクハラ防止講習会よりもだいぶ interactive であったといえよう。特に参加者の 6 割近くが、ケーススタディは参考になったという印象を持ったことは、大きな成果といえる。セクハラ防止講習会と言っても、セクハラ予防・解決に果たす役割は、ラボヘッド、助手・ポスドク、学生など、それぞれの立場によって異なっている。理学系研究科としては、将来的には対象を絞った異なるタイプの複数の講習会を定期的に行い、全員が必ず一回は講習を受けることを規則化していきたい。次回は要望の高かった、学生を対象とした講習会を行う予定である。



セクシュアル・ハラスメント防止講習会の様子

超高速強光子場科学研究センター設立記念式典

センター長
山内 薫 (化学専攻 教授)

本学大学院理学系研究科では、新しい学際研究分野である超高速強光子場科学分野の振興と、日本学術振興会の「超高速強光子場科学」と連携し国際学術交流を推進することを目的として、「超高速強光子場科学研究センター」を新たに設置することになった。その設立を記念する式典は平成 17 年 3 月 25 日 (金) 15:00 より東京大学理学部 1 号館中央棟小柴ホールにて行われ、15:00 ~ 15:40 は記者発表、15:50 ~ 17:00 に記念式典が行われた。

記念式典ではセンター設立の趣旨をセンター長である山内からご報告し、続いて岡村定矩研究科長、森見憲財務部長・研究協力部長よりご挨拶を頂いた。この後、来賓として日本学術振興会の古川佑子・国際事業部長、文部科学省研究振興局・基礎基盤研究課の小島泰典様よりお言葉を、そしてロシア科学アカデミー会員、Leonid Keldysh 教授にキーノートスピーチを頂いた。来賓の方々からはお祝いの言葉とともに、本センターの活動への期待が述べられた。場所を変えてレセプションが行われた。

化学本館正面玄関にて



スウェーデン高官の理学系研究科訪問

太田 俊明 (化学専攻 教授)

去る 3 月 15 日、スウェーデン王立科学協会副会長スベン・克蘭ダー (Sven Kullander) 氏及びエネルギー省副長官ラース・テグネール (Lars Tegner) 氏が本学理学系研究科を訪問した。これは、文部科学省の招聘によって短期来日した中での訪問であった。スベン・克蘭ダー氏はウプサラ大学名誉教授で、高エネルギー物理学を専門とし、わが国にも有馬元東大総長、小柴名誉教授、戸塚 K E K 機構長など多くの関連分野の友人を持ち、大阪大学核物理学センターの客員教授をしたこともある親日家である。ラース・テグネール氏は訪日初めてのことであったが、ウプサラ大学で物理化学の助教授からエネルギー省に転身して、現在、副長官 (エネルギー開発局長) であり、国のエネルギー問題、環境問題の責任者として忙しい毎日を送っているとの

ことであった。

今回の訪日目的は日瑞のエネルギー開発事情と、エネルギー関連基礎科学研究についての情報交換にあった。私はたまたま対応者として来日のお世話をしたが、超過密スケジュールで、文部科学省への訪問と講演、日本学術振興会の訪問、つくば市の産総研でのソーラープラントの視察、高エネルギー加速器研究機構の訪問、原研那珂研究所での ITER 計画の視察などを 3 日間で行い、その合間を縫っての東大訪問であった。理学系研究科で

は岡村定矩研究科長、佐藤勝彦・元研究科長、酒井英行・核物理センター長らが出迎え、ちょうど東大にいられていた小柴先生も同席され、旧交を温められた。昨年夏にウプサラ大学で開催された UT-Forum (責任者: 佐藤勝彦教授) が大成功であったこともあり、東大とスウェーデンの大学間交流について話が盛り上がった。短い訪問ではあったが有意義であったようで、後で丁寧な感謝のメールをいただいた。今後、ますます日瑞大学間交流が盛んになることを願っている。



懇親の昼食会の一コマ。右よりペターソン (ウプサラ大学講師)、克蘭ダー、テグネールの各氏、および小柴先生。

第5回理学部海外渡航制度 渡航報告（イタリア）

■ ■ ■ 五所恵実子(国際交流室 講師)

海外の大学を訪問することで学生が国際的視野を持ち幅広い活動が出来るように、との目的で1999年にスタートした海外渡航制度で、2005年2月27日から3月7日までの9日間、9名の理学部3・4年生がイタリアのパドヴァ大学を訪問した。ヨーロッパの大学らしく大学の建物が町の中に点在し、まるで町全体がキャンパスのようなパドヴァはイタリア北部、水の都ヴェネツィアから列車で西へ30分の所にある古い街並みが美しい町である。滞在中は晴天に恵まれた一方で3月にも関わらず数十年ぶりという大雪にも遭遇したが、予想外の雪景色もまた趣深いものであった。

プログラムでは物理学、化学、生物学科の教室や研究室、原子核実験施設などを訪問したが、研究室や施設を案内して下さった先生方、大学院生はみな英語が堪能でとても親切なのが印象的であった。

博士号の取得後に他のEU諸国でポスト・ドクターをする人も多いためか、イタリア語、英語に加えてドイツ語も出来る先生もおられるのはさすがEUである。またパドヴァ大学では理学系で学ぶ女子学生や女性の教員も数多く見受けられ、物理学科でも学年によっては女性が半数を占めていた。

滞在3日目にはパドヴァ大と東大それぞれの理学系のカリキュラムの比較や教育制度の違いについて発表と討論を行ったが、時間が足りなくなってしまうほど次々と質問が飛び交い、白熱した2時間半であった。日本とは逆に大学は入学よりも卒業する方が難しいというイタリアでは学年を追うごとに学生が減っていくのだが、政府が科学研究費に十分な予算を割くことが出来ず、優秀な学生でもイタリアでフルタイムの教員職を得るにはポスト・ドクター後5～6年はかかるという現状は研究者を目指す若者にとってあまりにも厳しい現実である。学生達は毎晩食事を取りながら互いの国の社会、文化や言葉、考え方に加えて自分達の研究や人生、将来への希望など様々

なことについて語り明かしていたようである。

パドヴァ大学は1222年創立と、これまでに海外渡航制度で訪れた中でも最も歴史のある大学である。参加した学生達は、ガリレオの教壇が保存されている本部棟や物理学科の建物の地下にある物理博物館のみならず、町の中にあるスクロヴェーニ礼拝堂、世界遺産にも登録されている世界最古の植物園、そしてヴェネツィアを見学した。これを通して、現代に繋がる歴史を持ち、それを大切にしているイタリアという国を体験するという、ひじょうに貴重な経験をすることができた。

今回のプログラムはパドヴァ大学物理学科のコシモ・シニョリーニ教授と東大物理学専攻の酒井英行教授のご尽力のお陰で実現したものであり、この場をお借りして両先生に改めて御礼申し上げたい。またパドヴァ大学国際交流担当のクリスティーナ・ダミアニさんには宿泊やカフェテリアでの昼食券の予約など、プログラム全般にわたりご協力を頂き大変感謝している。最後の晩にパドヴァ大学物理学科長のご配慮により、学生1人1人の希望を最大限に叶えようと受け入れを詳細に渡りコーディネートして下さったシニョリーニ先生やパドヴァの学生達と一緒にご馳走になった美味しい本場の熱々ピッツァは、学生達にとってきっと忘れられない思い出となったに違いない。

海外渡航制度も今年で5回目を迎え、これまでに延べ145名の応募者の中から書類選考と面接で選ばれた49名の学部生が受け入れ大学のご好意とご協力により得がたい体験をすることが出来た。参加者にはそれぞれの大学で自分達を受け入れて頂いたことに対する感謝の気持ちを忘れずに、今度は自分達が海外からの学生を積極的に受け入れるつもりで日々の勉学・研究に励んで頂きたい。今回もプログラム運営に当



■ ウェルカムパーティーにて

たりお世話になった東大理学部の方、スタッフの皆さん、受け入れて下さったパドヴァ大学の教職員の皆様に深く感謝するとともに、今後ともこのプログラムへのご支援をお願いしたい。なお第5回海外渡航制度の詳細な内容については下記 URL の報告書をご参照下さい。

問合せ先：国際交流室

Email: ilo@adm.s.u-tokyo.ac.jp

[http://www.s.u-tokyo.ac.jp/ilo/home/Toppage\(J\).htm](http://www.s.u-tokyo.ac.jp/ilo/home/Toppage(J).htm)

パドヴァ大学訪問記

■ ■ ■ ■ ■ 白岩 学 (化学科 4 年)

イタリアというと何を思い浮かべるだろうか？ サッカーに熱中する国。陽気で愉快な人々。はたまたピザとパスタのおいしい国。渡航前の私もこのような印象しか持っていなかった。しかし、実際に訪問してみて新たな視点を獲得することになった。

第5回理理学部海外渡航制度にもとづき、理学部の学生9名が国際交流と研究室訪問を目的に、イタリアのパドヴァ大学を一週間訪問した。パドヴァ大学は、ガリレオが教鞭をとり、コペルニクスが学んだ由緒ある大学で、800年近くの歴史を持つ。古い面影を残す回廊やガリレオの教壇、中世の解剖場などがそのまま保存されており、東大にはない長き伝統を感じさせる雰囲気があった。温故知新という言葉があるが、彼らはまさにそれを体現しているのだろう。装置や設備などは東大のほうが恵まれていると感じたが、脈々と受け継がれている彼らの学問への姿勢は、見習うべきものがある。

この旅をより充実したものにしてくれたのは、多くの「出会い」である。まずは、イタリア人学生たちとの「出会い」である。彼らは、予想通り陽気であったが、

何より大学町パドヴァの一員であるという自負を持っていた。両大学の教育制度について議論し、ピザを片手に語り合い、雪球の交流を行い、たとえ人種や文化が違ってもお互いに理解し合えるのだと身をもって体験した。一方で、日本人の学生間の交流も貴重だった。どの人も学問に対する意識が高く、それぞれが強烈な個性を放っていた。渡航前には有志でほぼ毎日イタリア語のゼミを行い、これは大変役立った。街中では英語がほとんど通じなかったからである。さらに、刺激的であったのは、物理学科や原子核実験施設、化学科や生物学科を訪問した際、お互いの専門分野の内容を説明しあえたことである。

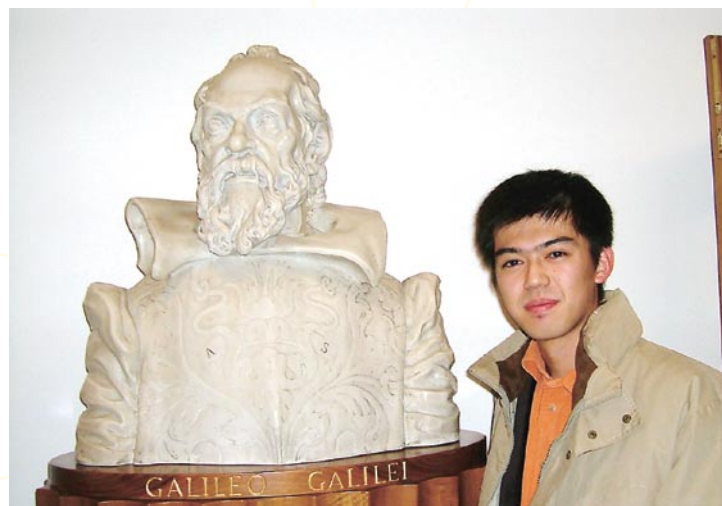
イタリアは、日本のような騒々しいネオンはなく、教会や大学を中心にした街

並みの落ち着いた国であった。キリスト教という絶対的規範を持っていることが大きく、心のよりどころを持っているのは彼らの強みだろう。日本がより成熟した国になり、世界から尊敬されるような国になるには、アイデンティティーや価値観の確立が不可欠であることを痛感した。

さて、イタリアとはどんな国だろうか？ まさしく「歴史と伝統を重んじる国」である。この旅を通して自らの視野を広げることができ、自分自身や日本を見直す一つの契機になった。学部生のうちにこのような経験ができたのは幸運としか言いようがないが、将来研究者を目指している私としては、この経験を生かして国際的な科学者になれるようさらに精進したい。



旧大学の回廊



ガリレオ・ガリレイ像と